TS（トータル・サティスファクション）を目指して　MI3

「主体性」の素

校長室担当より

三菱総合研究所によると、日本の人材需給バランスは、AI・IoE・ロボットといったデジタル新技術が徐々に雇用を代替することで、2030 年にかけて事務系・生産系の職が大幅余剰になる一方で専門技術職は一貫して不足感が強まっていき、職のミスマッチが顕在化するとのこと。具体的には、２０３０年には生産職は９０万人、事務職は１２０万人の余剰が出て、その一方で専門技術職は１７０万人が不足するとの予測が示されています。このような状況を生徒にも考えさせていく必要がありますね。

この三菱総合研究所は、これから迎えるこういったビジネス界で活躍する人材を FLAP 人材と呼んでいます。F（Find：知る・気づく）L（Learn：学ぶ）A（Act：実行する）P（Perform：活躍する）の４つのサイクルを回せる人材のことです。特に私が注目しているのは、F（Find:知る・気づく）です。これを教育に当てはめて考えてみた場合には、生徒が自分を正面から見つめ、自分の中にあるエネルギーの基盤を見つけることだと私は理解しています。今までなかなか注目されることはありませんでしたが、これこそが次の段階にある L（Learn：学ぶ）へ進むための重要なステップなのです。ところが、学校教育ではここに注目しないまま、いきなり L（Learn：学ぶ）の段階で、決まった試験範囲で先生から言われたり指示されたりしたことだけを学ぶことが多い。つまり外的な状況に対応・対策・対処するためだけに学んでいることとなります。その結果、活躍（Perform）することもなく実行（Act）するのみの人間を作ることがどうしても多くなってしまっているのです。

では、F （Find：知る・気づく）の段階でのターゲットは何か。それは、「他者に関係なく、自分はどうありたいか」を知ることと、「他者に対して、自分が見返りなしに与えることができるものは何か」を知ることだと考えています。主体性の素はこれです。これがないために、無気力になったり、トラブルを起こしてしまう生徒が多々見受けられます。まずはこの二つが生徒自身の中に大きな幹となって育つように、新しい美鈴が丘高校の学校教育を進めてまいりましょう。（令和７年１月１０日）